



## 春秋覇者の時代 (呉越の抗争)

5月③のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2023年5月21日(日)

春秋も末期になって歴史の焦点は南方(華南)に移る。

長江中流域の楚は、中原にも近く、大国としての地位を築いている。続いて急速に実力を伸ばしてきたのが長江河口に近い呉であり、その南の越である。

呉王闔廬は周の太伯を祖とし、次第に中原の国との接触に始まり、同時に西隣の大国楚と争うようになった。伍子胥や孫子を軍師として、楚と戦い、楚の都郢を占領するまでの成功を収めた。

その後、楚は秦の応援により盛り返し、両国の争いは解決することはなかった。

闔廬が呉の国を留守にして楚と争っているとき、その虚をついて、越が呉に攻め込んできた。越王勾踐は聖王禹の末裔で会稽を都としていた。呉と越は隣国同士で対立抗争するようになった。

呉が先に越を攻めたが、越王勾踐の巧みな戦術により、呉軍は敗北を喫し、呉王闔廬までが負傷するという痛手を受けた。そしてこの傷がもとで闔廬は死んだ。

臨終の際、闔廬は新王夫差に言い残した。「夫差よ父の仇は勾踐だ。よもや忘れはしないだろうな。」

闔廬を次いだ夫差は越への復讐を誓い、軍事訓練を強化し、これらの精兵を総動員して越に挑戦した。呉王夫差が復讐を目指して軍事力強化に努めていると聞いて、勾踐は先制攻撃をかけようとした。

重臣の范蠡が戦は自然の理に背くもの、おやめなさいという忠告にも耳を貸さず出撃命令を下した。そして越軍は敗戦を喫した。勾踐は夫差の臣下になるからという条件で降伏した。

勾踐は許されて帰って以来、我とわが身を苦しめて復讐の念を新たにした。いつも傍らに干した肝をおいて、起き臥しの度に手に取り、食事の度にその苦しさを味わった。

「会稽の恥を忘れまいな」と自分に言い聞かせた。臣下と常に労苦を共にし、自ら野良に出て働いた。

一方夫差は霸王となることを目的とし、斉に出兵し、北方の黄池に出向き、諸侯と会盟しようとした。だが夫差の留守を狙って越王勾踐が呉に攻めかかり、呉都を陥落させた。

参考：(司馬遷史記、楚世家、徳間書店)